

土地の記憶

丸山 夏椿

小学五年生の冬、私は新しい家に引っ越した。今まで住んでいたアパートメントとは全く違う、広くてきれいな一軒家だった。ちょうどその頃近くに新しい小中学校ができ、近くに移住する人が増えていた。その頃はまだ人が増え始めたくらいの時期で家の周辺は空き地だらけだった。私の家の左隣にも、一軒家二つ分くらいの広い空き地があった。

新しい家と新しい学校生活にも慣れつつあったある冬の日、雪が降った。

「ねえ見て!雪が降ってる!」

年に一度大雪が降るか降らないかの場所に住んでいたのも、めったに見られない雪に家族は大はしゃぎだった。私と弟とお父さんは急いでジャケットを羽織り、ニット帽を被り、手袋をつけ外へ飛び出た。家の隣にあった空き地には分厚く雪が降り積もっていた。私たちはそこで指先の感覚がなくなるまで遊び呆けた。雪だるまを作り、かまくらを建て、雪玉を投げ合ったのが楽しくてたまらなかった。

春になると、家の近くで白い梅が咲いた。夏になると、梅の木には緑の葉っぱがついた。そして秋になったある日、お父さんが凧を買ってきて、凧あげをしないかと言った。私はまた弟とお父さんと隣空き地に凧を持って行った。いざ凧を飛ばしてみるも、なかなか風に乗らず、すごく苦戦した。けれど何度も挑戦していたら、やっと高く飛んだのだ。

「飛んだ!すごい!高い!」

あの時の達成感は今でも忘れられない。

数カ月後だろうか。家のインターホンが鳴って、外へ出てみるとそこには幼稚園児くらいの男の子とそのお母さんが立っていた。その人によれば、左隣の空き地に新しい家を建てるための挨拶をしに来たのだという。ショックだった。もう空き地で遊ぶことができなくなる。雪合戦も、凧あげも。それから程なくして隣に家が建った。楽しい思い出が詰まったあの土地に。でもその時にはもう私もあまり外で遊ぶ事に興味がなくなっていた。

かつて家族で忘れられない時間を過ごしたあの空き地には、立派な一軒家が建っている。家の前を通りかかると、時々子供の笑い声が聞こえたり、おいしそうな匂いがしたりする。あっという間に私も高校生になり、雪で遊んだりや凧を飛ばしたりする年齢ではなくなったけれど、毎年雪の季節が来る度にあの時の事を思い出す。土地には、私たちが想像する以上に沢山の思い出が詰まっている。私が空き地で遊んだあの思い出のように、これからも、色々な人の色々な思い出が、土地に記憶され続けていく。その記憶は色褪せることなく、永遠に残り続けるのだろう。